

## 29

## 『杉山真伝流』における穴性概念の萌芽について

浦山 久嗣

赤門鍼灸柔整専門学校 東洋療法教育専攻科専任教員

**I. はじめに：**中医穴性学は、羅兆琚（1895～1945）の研究を基礎に、『鍼灸集錦』（鄭魁山；甘肅省科学技術出版社1978年刊）における各穴の「効能」や、『鍼灸心悟』（高立山；人民衛生出版社1985年刊）における「氣・血・虚・実・寒・熱・風・湿」に分類した「穴性」などによって一般化した経穴効能の薬性論的分類概念である。しかし、これに先立つこと約200年に、特定の経穴について歴代主治を臨床実践することで、総合的に効能特性をまとめた文献があった。それが島浦和田一（?～1743）の撰になる『杉山真伝流』である。本発表はその概要を紹介し、経穴主治研究に資することを願うものである。

**II. 内容：**『杉山真伝流』は、第1冊「表之巻・巻之上（第一・二・三）」、第2冊「表之巻・巻之下（第四・五）」、第3冊「中之巻・巻之上（序・第一・続・二）」、第4冊「中之巻・巻之中（第三之上・第三之中・第三之下）」、第5冊「中之巻・巻之下（第四之上・第四之中・第四之下）」、巻6冊「竜虎之巻（第一・二・三）」の3部6冊があり、さらに「別伝三関之法（巻物2軸）」が伝わる。和田一の「中之巻序」には「元禄六年（1693）」の記載があることから、和一の生前に『杉山真伝流』の概要が確立していたことを示す。

その『中之巻』巻之中（第4冊）と巻之下（第5冊）には、①三回の鍼の事（中腕・大横・石門・天枢・下腕・盲俞・関元・水分・陰交）、②腹部三体穴の伝（上腕・中腕・下腕・不容・梁門・太乙）、③五刺の法（京門・章門・帯脈・大赫・志室）、④三回の反し（肝俞・脾俞・胃俞・胃倉・胞背）、⑤腹部三体の反し穴（肺俞・膈俞・胆俞）、⑥五刺の反し穴（腹哀・魂門・石関・委中・腹結）、⑦胸脇七星の穴（氣房・膺窓・乳根・期門・大包・極泉・中府）という7種の処方配穴が示され、都合38穴について、50種を超える医書・史書・易書などを博引してその主治を詳細に解説する。

なかでも、中腕：「其の用に五有り。諸虚不足を補ふが故に、専ら諸もろの氣脱を復し陽を回らすは、一なり。元気を益すは、二なり。脾胃を健やかにするは、三なり。血分を収め、血虚を補うは、四なり。湿を燥かし燥を滋すは、五なり」、盲俞：「其の用に三有り。胸中に逆氣満ち塞がるを去るは、一つめなり。心腹寒えに感じて疔痛するを止むるは、二つめなり。宿食・宿酒を消すは、三つめなり。復溜・陰陵泉の佐を為すなり」、肺俞：「其の用いる所の者は、肺氣の壅ぎ遏めたるを開き衝かし、肺氣を下降させ、衛榮をして循還せしむる策たるのみ」、膈俞：「痰飲を治すに、殊に奇効有り。此れ乃ち痰の本を治す。……膈俞は、上は心火の、下は肝木の陽氣の純なるを得、一に能く蔵府の水湿を泄す。湿痰も、陽氣を得れば開く」、膺窓：「膺窓は、善く陽を順にす。則ち胸脇の癰腫する者は、寒熱・短氣し、其れ乳癰・腸鳴・泄瀉する者の若きは、胃土が水湿に侮られる所となり、其の氣は倍ます薄弱となり、諸症を致す」、期門：「其の用に五有り。榮衛を和し十二経を通じ、発汗し又た止汗するは、一なり。腹満・胸中の結熱を去るは、二なり。肝血を補い、血分を静肅にし、微汗を発するは、三なり。陰を救い、讒語を止め、魂を定めるは、四なり。癥瘕・積聚・痞塊を破るは、五なり」などは、すでに穴性理論に類似した概念に到達していたうえに、その根拠とそこに至るまでの過程をも詳述している。

**III. 考察と結語：**いわゆる穴性理論においては、その根拠が明示されることはほとんどなく、言わば老中医の経験と直観によって獲得されたもので、その評価は本場中国でも安定せず、また異説も頗る多い。『杉山真伝流』は、経穴効能を歴代の経穴主治に求めることでその根拠を明示するのみならず、「巻之上」が管鍼法の多彩な術式を特集することから、効能を具現化するために管鍼法を駆使していたことが窺える。この方式を全経穴に敷衍することで日本流の新しい穴性学に発展させることも不可能ではないと考えられる。

なお、本発表は、JSPS 科研費 24590642 「日本伝統医学における基礎理論の基盤整備」の助成を受けた。